



大分大学理工学部(工学部) 同窓会機関誌 翔工 第31号

大分大学理工学部(工学部)同窓会「翔工会」
〒870-1192 大分市旦野原700 大分大学理工学部内
電話097-554-7804, 097-554-7823
令和3年3月17日発行

機関誌「翔工」第31号の発行にあたって

同窓会長 松尾孝美



機関誌「翔工」第31号をお届けいたします。同窓生の皆様におかれましては、昨年よりの新型コロナウイルス感染症による環境の激変等により、ご苦慮されているかたも多いのではないかと思います。そのような中、理工学部(工学部)同窓会の活動に対しますご支援とご協力に心より厚くお礼申し上げます。

今年度は、学部改組に伴い、同窓会の部会構成についても変更が必要になっておりました。6月の理事会で会則案の検討をしましたが、次年度からの部会構成に対して意見が分かれました。理工学部改組に従い、現部会の構成を改組後の8コース構成にする意見と改組でコースのなくなったエネルギー部会を存続させるという意見が出て折衷案を審議しましたがまとまりませんでした。特に、エネルギー部会を存続させるのであれば、他部会と同様に活動を維持すべきであるという意見や統合されたコースの部会として電気電子部会だけでなく、電気部会や機械部会も残してもいいのではないかとという意見もありました。このため、エネルギー部会については令和2年度で廃止することとしましたが、いったん審議を中断し、再度検討することになっていましたが、なかなか部会則案のまとめができず、やっと年越しで、評議員、理事、顧問の方々に新規部会構成を

含む会則案(特徴は、支部の中に部会を立ち上げることができることと現在の部会は大学支部をつくってそこに配置するというもの)をメールにて提案しました。新年度に評議員と顧問のおひとりずつから、ご意見をいただきました。その中で、構成が複雑であり、部会は大学の改組に伴った組織にした方がわかりやすいというご意見をいただきました。このご指摘はごもっともなことと思ひ、限られた時間とコロナ禍の制約のもとでの変更は難しいと判断しました。このため、現状で新入生を準会員とする創生工学部会と共創理工学部会、コースが再編されたエネルギー部会を解散、電気部会と電子部会は電気電子部会に統合、他部会是新コースの名称に合わせた部会名称で存続することで対応させていただきたく存じます。詳細の審議は新年度に行いたいと思いますので、ご理解いただければと思います。この度は、審議ができてしまったことに、ここからお詫び申し上げます。

工学部は2017年4月より、理工学部2学科8コースに改組され、2021年3月に初めての卒業生を送り出そうとしています。理工学部長の越智義道教授(数理科学コース)に理工学部4年目のトピックスについて、ご寄稿いただきました。改組特集としてこれまで各コースの紹介をご寄稿いただいておりますが、今回は、創生工学科建築学コースの黒木正幸コース長からコース紹介をご寄稿いただいております。

今年度は5名の教職員の方々が退職されます。数理科学コースの家本宣幸教授、自然科学コースの仲野誠教授、電気電子コースの池田直美嘱託職員、福祉メカトロニクスコースの木庭博美嘱託職員、学務係の内藤道夫嘱託職員です。多くの同窓生が大変お世話になりました。これまでのご恩に厚く御礼申し上げます。今回の機関誌では、理工学部への改組の際に教育福祉科学部（現教育学部）から異動された家本先生と仲野先生から、これまでの思い出のご寄稿をいただきました。なお、今回の機関誌は、こちらの調整不足により、会員便りや学内便りの記事も掲載できず、申し訳ありません。

2020年度の大学内の出来事としては、全国の大学も同様ですが、リモートの講義のため、対面の交流ができず、学生のみなさんはとても寂しい思いをしていると思います。また、例年開催されてきたホームカミングデーや同窓生との交流会も中止になってしまいました。さらに、翔工会の評議員会も、会則の変更提案の不手際も加わり、開催することができませんでした。2021年度もまだ、コロナ禍の収束は程遠く、今後の展開が予想できない状況で、やはりリ

モート開催などの代替策を検討する必要があります。

今後の予定ですが、2022年5月に工学部が創立50周年を迎えます。現在、学部内に50周年記念行事実行委員会が立ち上がり、検討を開始しています。同窓会も50周年に向けて、理工学部支援の事業の検討をしております。今後、いろいろな面でお願いする事案も出てくると思いますので、その際には、どうぞよろしくお願いいたします。

現在、同窓会機関誌を翔工会ホームページにて公開し、会員の皆様には機関誌を発行したことをお知らせするはきを郵送いたしております。同窓生の皆様には、ご不便をおかけしますが、ご理解をお願いいたします。

翔工会HP：<http://shokou.csis.oita-u.ac.jp/>

また、同窓会行事の広報のために、Facebookを開設しています。Facebookで「大分大学工学部同窓会」を検索していただければ、すぐに見つかると思います。

末筆ではございますが、皆様方のご健勝を祈念しますとともに、理工学部（工学部）同窓会の活動に、かわらぬご理解とご協力をお願いいたします。

学部長からのご挨拶

理工学部 教授 越智義道



工学部同窓会「翔工会」の会員の皆様には、益々ご活躍のことと存じます。令和2年4月から、元理工学部長の劉孝宏教授から学部長を引き継ぎ、新年度も続いて担当することになりました越智義道です。よろしくお願いいたします。

令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大のため教育・研究ともに大きな影響を受けた1年でした。昨年3月・4月に先立って新型コロナウ

イルス感染が国内で認識されることとなり、令和元年度の卒業式・修了式が中止になり、令和2年度の入学式も挙行されませんでした。理工学部では、新入生ガイダンスを感染予防に注意して、短縮した形で実施したものの、前期の講義がしばらくは停止となり、4月22日からようやく一部講義がオンラインで実施されることになりました。その後5月7日から対面授業・オンライン授業併用の形で授業が実施されることになりましたが、実験など対面でなければ実施が困難な授業を除き、基本的には講義等はオンラインで行うこととなりました。令和元年度の後期終了後、帰省していた学生も多く、新学期に入ってから移動制限や大分への帰県後の健康観察、また帰国した留学生の渡航禁止処置に伴う対応など前期初頭にはかなり混乱した事態が続いていました。そのような状況の中、理工学部教務委員長の岩本光生先生を中心に各コースの教務委員と事務局の学務係・総務係一体となった尽力と教職員の皆さんの協力により、授業のオンライン化については理工学部では全学に先駆けて、広範な範囲で進めることができました。とりわけオンライン授業の開始時には理工学部技術部の皆さんには、理工学部ばかりでなく全学の授業支援に関わっていただきました。お陰で5月末には落ち着きを取り戻してきましたが、前期については、本格的な授業実施が遅れたために、夏休みを返上して8月後半まで授業、9月8日まで期

末試験というスケジュールで実施しました。この間、オープンキャンパスのオンライン化などの変更も行ったりしています。後期は例年通り10月1日から開始しましたが、11月初旬に行っていた学園祭や大学解放イベントなどは中止にせざるをえませんでした。冬が近づくにつれ感染が再び拡大し始め、後期に入り、文部科学省からの指示もあり、対面授業に戻しかけていましたが、再び基本をオンラインに戻して実施し、何とか後期の講義・期末試験を終えることができました。この騒動のなかで、講義等のオンライン化が一気に進み、学生指導もZoomなどで行うことが当たり前になってきており、学内での情報化が一挙に進んだ感があります。一方で学生同士の、あるいは教員と学生とのつながりが希薄になっている状況は否めないところで、どう学生と向き合えばよいのか、彼らの人としての成長にどのように関与して行けばよいのか、模索が続いています。また、研究面でも多くの研究会や学会が中止になったりオンラインでの実施に切替るなどしています。移動制限の影響は大きく、とりわけ国際学会や海外研修での研究者の国際的な移動はほぼ停止状態が続いています。オンラインで情報交換ができるとはいえ、実際に現地で研究者と時間をとって詳細な議論を行うことができないために、個人的なつながりをもつ機会が減ってきていることは大変残念なことです。一刻も早く新型コロナウイルス感染が収束し、以前のような研究交流が行える日が来ることを切望しています。

このように、新型コロナウイルスに振り回された1年でしたが、理工学部としては発足後4年目で、卒業生を社会に送り出す年になります。コロナ禍での就職活動で4年生の皆さんは苦勞されたことと思いますが、企業の方々から高い評価をいただいて、12月時点の就職内定率は95.1%になっています。昨年同時期の内定率が96.2%でしたので、若干下がってはいますが、ほぼ同水準を維持していて、この大変厳しい状況の中で、よく健闘してくれているものと考えています。

完成年度を迎えたことで、新たな教育・研究活動体制での1サイクルが終了したことになりますので、今後理工学部全体としての評価検証を行い、新たな改善・改革につなげてゆかなければなりません。また、大分大学の新たな構想として、健康寿命の延伸や医療分野での新しい基盤技術の教育研究を目指す新たな組織の設置を目指すこととなりました。この組織は医学部の新学科として構想されていますが、その中では臨床医工学にかかる教育も計画されており、医療分野で工学的な素養をもって活躍する人材育成を目指すことになります。大きく社会構造が変革している中で新たな技術・素材・サービス創出にかかる重要性の増大に対応するために、理工学部としてもどのように貢献できるかを学部改組と連動して検討を始めています。

さらに地域に貢献する大学としての大分大学の役割の推進のため、昨年8月に大分県農林水産部と理工学部との間で連携協定を結びました。大分県の農林水産行政の抱える様々な課題について、学部の理工学分野における教育・研究の機能を活用して課題解決をはかり、また、一方で人材育成の観点からの交流も含めて、学内での地域理解を促進し、地域に学び世界に発信できる教育・研究体制の強化と活性化につながることを期待しています。これまでに、大分県農林水産部関係者と情報交換の会合を持つなど、具体的な連携のあり方について協議が始まっています。

学内の環境整備については、前述のように学内の情報環境が強化され、学生が利用できるWiFi環境等も充実したものにしました。また、本年度は理工学部後援会から、構内に設置されたバイク置き場に屋根付き施設の寄付を受けました。これによりバイクで通学している学生の皆さんが雨天登下校の際に濡れずに雨具の脱・装着が可能になっています。後援会のご厚情に感謝申し上げます。

令和3年度を迎えるにあたって、このコロナ禍からの脱却には今しばらくかかりそうで、教育研究面で不自由な状況が続きそうですが、可能な限り学生の皆さんへの教育指導の質を担保し、次世代を担う有為な理工学技術者・研究者を社会に供給し続けるよう努力したいと思っています。さら

に、大きく変容する社会の中で、より効果的な教育・研究機関となるよう、現在検討中の学部・大学院の改革を急ぎたいと思います。

また、令和4年度には大分大学工学部が発足して50周年を迎えます。これまで諸先輩方のご尽力により、工学部・理工学部と半世紀にわたり着実に実績を積んできておりますが、50年目の節目を迎えるにあたり、記念事業を計画中です。今後「翔工会」の会員の皆様にもご相談し、記憶に残る事業としたいと考えております。ご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。



＜大分県農林水産部と理工学部との間で連携協定＞



＜バイク置き場の屋根付き施設＞

理工学部特集

「創生工学科建築学コース」

令和2年度コース長 教授 黒木正幸

同窓生の皆さまにおかれましては、新型コロナウイルス感染症の影響で先が見通せない状況にあって奮闘中のことと存じます。

2017年4月の工学部から理工学部への改組に伴い、私たちのコースは福祉環境工学科建築コースから創生工学科建築学コースへ生まれ変わりました。本年度末で改組から4年が経過し、新コースで初めての卒業生を輩出いたします。

建築学コースの学生は、安全、安心、快適で持続可能な建築と都市を創造するために、建築学の基礎となる数学、自然科学、情報技術等に関する基本的知識を習得します。合わせて、学術・技術・芸術の総合である建築学における建築環境、建築計画、都市計画、建築構造、建築材料・施工を中心とした幅広い最先端の教育と研究に加え、建築のイノベーションに必要な理学的基礎、CADやシミュレーション技術を学びます。その結果、卒業生は建築士免許に

関して言えば、一級建築士、二級建築士、木造建築士のすべてについて受験資格が得られます。これまで一級建築士の受験については卒業後2年間の実務経験が必要でしたが、建築士法の改正により、昨年度の卒業生から卒業と同時に受験資格が認められるようになりました。これにより受験機会が増え、一級建築士を安定的に確保するといった社会要請に応えることが期待されています。

また、本コースでもカリキュラムと連動した「建築プログラム」という教育プログラムを設定し、2009年度にJABEE（日本技術者教育認定機構）の認定を受けて以来、改組後も引き続き運用しています。技術士法によれば、JABEE認定プログラムの修了生は技術士の第一次試験が免除され、技術士補の登録資格を有します。また、JABEEは技術者教育の認定に関する国際的枠組であるワシントン協定に加盟し、キャンベラ協定にも暫定加盟して

います。したがって、JABEE認定プログラムの修了生は、国内での活動もさることながら、海外の大学院や企業に入る際や海外での活動を行うにあたっても有利になります。本コースでは、2009年度以降の大多数の卒業生がJABEEプログラムの修了認定を受けています。

少子化が進み、今後の大学では優秀な学生をいかに確保するかが大きな課題となってきました。つきましては、同窓生の皆さまには、皆さまの二代目、三代目の方々を本学に送り込んでいただきますようお願い申し上げます。ま

た、皆さまが仕事を展開される上で修士や博士の学位が求められる場面が増えることも想定されます。本学大学院を研究の場として活用していただきたく、学位取得をお考えの際には、是非とも研究室の先生方に相談をしていただきたいと思います。

以上のように、建築学コースでは、これからも教育と研究を通して社会に貢献する存在でありたいと考えておりますので、引き続きご支援とご協力をお願い申し上げます。

退職される先生方より

「大分での生活を振り返って」

理工学部 共創理工学科 数理科学コース 教授 家本 宣 幸



令和3年3月に定年退職を迎えることになりました。月日の経つのは早いもので、昭和58年4月に琉球大学教育学部に採用され6年間の沖縄での勤務の後、平成元年大分大学教育学部に転任、その後平成29年大分大学理工学部の発足にあわせ理工学部の一員として4年

間を過ごさせていただき、ちょうど理工学部一期生と一緒に卒業となりました。38年間の研究生生活、そのうちの32年間が大分大学での勤務となりました。

初任地の沖縄は私にとって、足も踏み入れたことのない初めての土地で、これから研究ができるか不安を持ちながらの赴任でした。幸い理学部があり研究環境に恵まれ、どうにか私の研究生生活を始めることができましたが、言葉も風習も違い、とにかく暑い。大分の梅雨明けから盆明けの暑さが、沖縄では5月の連休から10月中旬まで続きます。暑さに弱い家内は体調を崩しがちで、そんな折、縁あって平成元年に大分大学に転任することとなりました。

私は山口県出身で、私にとっての大分は小学校低学年の家族旅行、中学校の修学旅行、新婚旅行と琉球大学在任中に会合で一度、合計4度立ち寄った土地でした。小学校の家族旅行では別府駅すぐそばの大仏、中学校の修学旅行での別府から阿蘇にかけてのやまなみハイウェイの雄大な景色が私の記憶の底に残っていました。最初の1年で「夏の夜はとにかく涼しい、冬は雪が降らない、魚と野菜が新鮮でおいしい、椎茸がとにかくプリプリして安い」と感じました。学生時代からいろいろな土地に住みましたが、こんな住みやすい所はないと思いました。

数年生活するうちに、大分のいろいろな良さがわかりました。自然が美しい、温泉があちこちにある、食べ物の素材の鮮度が抜群に良い、魚がよく釣れる等々。冬、雪が降らないのは大分市周辺だけだったことも後で気づきました。美しいくじゅうの山々や草原、そこら中にある温泉、別府の温泉、湯平温泉、長湯温泉にはよく通いました。最近では長湯の山奥の秘境にある自然の炭酸水の湧き水を知り感激しました。くじゅう方面をドライブし、湧き水を汲み温泉に入って帰るというのが最近の週末のパターンと

なっています。黒川温泉、筋湯温泉の旅館も泊まり歩きました。大分市内から10度近く気温が下がります。そんな場所が市内から車で1時間と少しの距離にあることが未だに信じられません。

ある時期から、大学の事務の方に県南方面の磯釣りに連れて行ってもらうようになりました。そのうち、沖縄に行かなくても良い釣り場はいくらでもあることに気づき、現在でも週一回は近場の波止や佐伯市の蒲江や鶴見の地磯に通い続けています。思い出深いのは、大分川で川に落ちながら釣り上げた90cm超えのスズキ、蒲江の筏で竿を折りながらあげた10kg超えの真鯛です。退職しても体力がある限り続けたいと思っています。

遊びの話だけで終わるのもまずいので、少しか研究の話もしておこうと思います。私は幾何学の位相（トポロジー）と呼ばれる、簡単に言えば図形の分類を目的とした分野を専門としています。大学で数学を学ぶ学生に立ちはだかる「 ε δ 論法」というなかなか超えられない数学の壁がありますが、その壁の分野です。数学の中でもかなり難解な分野だと思います。その中で、二つの小さな分野を開拓しました。一つは順序数の積の位相的性質の解明です。細かい説明は難しいのですが、各国の研究者の協力を得て約30編を国際誌に掲載することができました。もう一つは数年前から始めた辞書式順序積の位相的性質の解明です。こちらはまだ10編程度です。始めたばかりの新しい分野でまだ何もわかっていない状態です。退職後のライフワークに残しておこうと思っています。

私が赴任した平成元年、大分大学は教育学部、経済学部、工学部の3学部の大学でした。今はネットで殆どの情報を得ることができですが、当時、理学系学部のない大学では数学関係の雑誌類が足りず、琉球大学の充実度を知っている私にとっての研究生生活は不自由なものでした。いずれ何かの機会に、理学系学部で数学系の学科を作りたいと考えていました。転機が訪れたのは全学的な改組話が持ち上がった平成26年頃です。私の所属する教育福祉科学部が小学校教員養成に特化する話が出てきたのに合わせて工学部から数学関係者で何かやらないかという話をいただきました。様子を見ているうちに、教育福祉科学部の理科の先生方が工学部に合流するという話が持ち上がりました。これを受けて、私が動けば理工学部ができると判断し、工学部に転籍する決意ができました。当時理事だった現学部長の越智先生と立ち話で、理科系と数学系のコースを立ち上げ

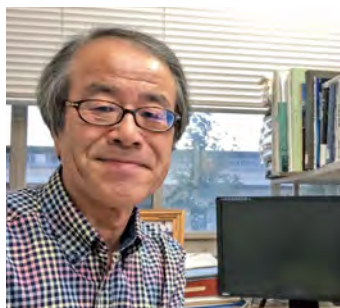
れば理工学部で改組できると思うのでやってみようじゃないかという話をしました。その後、教育学部の改組から1年遅れましたが、平成29年理工学部が発足しました。越智先生の陰ながらのご尽力があったものと察します。しかし、教育学部から来る先生方には教養の講義を多く持ってもらうという話が出たり、理工学部で転籍した私が教育学部の残務の上に工学部の授業を持たされたりしたのはスタンスの違いを感じました。この4年間の私の夢は、理工学部1期生の受け入れ先となる大学院理工学研究科の数学系の学科を発足させることでした。何かのお手伝いができればと、私なりに努力をしましたが、その夢が叶わなかったのが一番の心残りです。

さて、振り返ってみますと大学を取り巻く環境もずいぶん変わってきました。38年間の研究生生活の中で最も大きな変革は国立大学法人化だったと思います。90年代のバブル崩壊後の経済市場の危機的状況の中、多すぎる公務員を減らそうとした政策で、平成16年度より国立大学が法人化されました。同時期に行われた政策が非正規社員の合法化、郵政民営化、奨学金の有利子化などです。気づいてみると、江戸時代さながらの政治家・官僚を頂点とする身分制度が

出来あがっていました。法人化以前は雑用も少なく自由に研究できました。研究費も年間100万円を超えたこともありましたが、当初は法人化しても運営費交付金は減らさない約束でしたが、今や人員は減らされ研究費は30万円台となっていました。運営費交付金や研究費を得るため、研究そっちのけで書類ばかりを書くようになり、地方大学は地域貢献さえすればよいという声さえ聞くようになってきました。給料も90年代から殆ど変わりません。コロナのワクチンでさえ他国に先駆けて作れない国になっていました。日本の高度成長を支えていたのは地方大学を含めた裾野の広い国全体の研究力だったと思います。日本の研究システムが破壊されてしまったと感じました。

大学を取り巻く環境は今や一段と厳しくなっています。コロナで、観光立国は間違いであったことに気づかされました。やはり、資源の少ない日本の進む道は技術立国しかないと感じています。地道な基礎研究からの物作りこそが日本の生きる道だと信じます。理工学部の在学生、卒業生の皆さん及び先生方の一層のご健勝を心からお祈りいたしまして退職のご挨拶としたいと思います。

理工学部 共創理工学科 自然科学コース 教授 仲野 誠



2021年3月末に定年退職となる自然科学コースの仲野です。理工学部には工学部が改組してからの4年間お世話になりました。翔工会会員としては、理工学部からの卒業生は今年から加わることでなると思いますので、会員のほとんどの皆様は私をご存知ないかと思

います。実は私はその前の30年間は教育学部に所属しておりました。したがって、本稿での大分大学での思い出はこの間のものになってしまうことをお許しください。

私自身の研究分野は天文学です。大学院時代には、高温で大質量の恒星から放射される紫外線によって星間空間にあるガスが電離される星間電離領域や、その周辺にしばしば見られる暗黒星雲を主に可視光で観測するという研究を行っていました。その頃からこのような星間物質の観測は可視光だけでは不十分で、電波や赤外線という多波長によるものが中心になりつつありました。ハレー彗星が世間の注目を浴びた1986年頃は、私もそのような新たな観測手法へと手を広げつつある時期でした。しかし当時は天文学の研究が続けられる就職先などほとんどなく（現在もそうですが）、学位は取ったもののODとして研究室に残っておられた多くの先輩方も上の年齢層から次第に研究をやめてゆくという状況でした。私も就職のあてがあるわけでもありませんでしたが、幸運にも当時の私の指導教官を通して教育学部の川西博先生からお話をいただき、大分大学での教育に参加できたことは大きな喜びでした。

教育学部でも数年ごとに学部の改組が続き、様々なことがありましたが、教育面では次第に学校教員養成課程では理科教育（地学）と、いわゆるゼロ免課程である情報社会文化課程では情報教育を担当するようになってきました。

2013年秋から1年半は附属中学校の校長としての得難い、一方で気苦労の多い経験もさせていただきました。現場での教師や生徒たちの純粋さに感動する一方で、東京ディズニーランドへの修学旅行や全日本合唱コンクールへの生徒の引率なども深く印象に残っています。

研究上では学部内の激しい競争を勝ち抜いて（実は学部長室であみだくじ）、1990年から約1年間在外研究員としてオーストラリアの首都キャンベラに家族で滞在できたことが、まずあげられます。郊外にはオーストラリア国立大学の歴史ある天文台があり、徹夜での天体観測が明けた早朝には、カンガルーが天文台の芝生の上で飛び跳ねている横をすり抜けて帰宅したものでした。この滞在で電子メールやUNIXといったコンピュータネットワーク環境や、最新の赤外線観測などに身近に触れたことが後々までも研究上の大きな財産になりました。その後は星誕生の現場を解明する研究を進めていくことになります。

地元天文アマチュアの方々との交流から、大分に科学館がないことに気付かされたことで、2005年から始めた市民活動「大分に青少年科学館を作る会」にも深くかかわりました。工学部関係者は同じ構内宿舎におられた方々以外とはあまりご縁がなかったのですが、当時の羽野忠学長をはじめとして工学部におられた藤田米春先生、宇津宮孝一先生などにはこの活動に多大なご協力をいただきました。当時流行しだしたサイエンスカフェなどを市内等で開きつつ、市長や知事にも陳情を繰り返したのですが、現在に至るまで科学館の実現に至っていないことは大分にとっても大変残念なことです。

また2012年に大分大学で開催できた日本天文学会秋季年会も思い出深いことでした。大分県内でも天文学会に所属する研究者は私以外ほとんどいない現状にもかかわらず、無謀にも引き受けてしまったのです。県庁舎での記者会見、教養棟と教育学部棟のほとんどの教室を使つての3日間の学会と付帯行事、担当者として休む間もなく飛び回りました。参加者約900名と700件以上の学術講演で盛況のうちに

終ったときはさすがにホッとしました。これも私の窮状を見かねた当時の教育学部の先生方（もちろん天文学とは無関係の分野の）と数十名の学生の協力があったのでした。

この4年で完成した理工学部でも再び新たな試練と模索

が始まっています。大学も人も常に変化し続ける昨今、こんなにも長い間大分大学で仕事できたのも多くの方のおかげだと、ひしひしと感じています。これからも大分大学や大分大学同窓生の皆様のご活躍を願ってやみません。ありがとうございました。

同窓会活動状況

令和2年度の活動状況および現在の理事、評議員の名簿を以下に掲載いたします。

■ 活動状況

§ 令和2年6月12日（木）

第1回理事会（大分大学にて）

議題

- (1) 役員の交代について
- (2) 理事会、事務局の新体制と会則案の検討について
- (3) 令和元年度決算書（案）について
- (4) 令和2年度予算書（案）について
- (5) 監査について
- (6) 今後の事業等の検討について
- (7) 同窓会連合会について
- (8) その他

§ 令和3年3月17日（水）

機関誌「翔工第31号」発行予定

§ 令和3年3月25日（木）

卒業祝賀会開催予定

■ 支援助成事業等

§ 学科・留学生補助：留学生友の会（年会費）

理 事	島田 明拓	(修士課程在学、機械副部長)
"	石井優太郎	(修士課程在学、機械代表理事)
"	原 正佳	(電気平3卒・5院修了、電気部会長)
"	槌田 雄二	(電気平4卒・6院修了、電気副部長)
"	佐藤 尊	(博士課程平23修了、電気代表理事)
"	西島 恵介	(組織平1卒・3院修了、組織部会長)
"	賀川 経夫	(組織平3卒・5院修了、組織副部長)
"	足立 徳子	(組織平5卒、組織代表理事)
"	牛ノ濱三久	(応化平7卒・9院修了、化環部会長)
"	竹内 直紀	(修士課程在学、化環副部長)
"	平尾 優妃	(修士課程在学、化環代表理事)
"	斎藤 晋一	(エネ平2卒・4院修了、エネ部会長)
"	矢田 健二	(エネ平21卒・23院修了、エネ副部長)
"	櫻井 優也	(修士課程在学、エネ代表理事)
"	黒木 正幸	(建設平1卒・3院修了、建設部会長)
"	富来 礼次	(博士課程平15修了、建設副部長)
"	秋吉 善忠	(博士課程平24修了、建設代表理事)
"	楠 敦志	(電子平2年卒、電子部会長)
"	河野 将司	(電子平29年院修了、電子副部長)
"	木元 裕貴	(電子平30年院修了、電子代表理事)
"	佐藤 大和	(修士課程在学、福祉部会長)
"	木村 洸揮	(修士課程在学、福祉副部長)
"	宮崎 隆誠	(修士課程在学、福祉代表理事)

■ 評議員名簿

大分支部	支 部 長	江口 正一	(エネ昭54卒・56院修了)
	副支部長	塚本 賢治	(知能平19卒・21院修了)
	副支部長	東 宏治	(エネ平11卒・13院修了)
福岡支部	支 部 長	小田 誠雄	(組織昭59卒・61院修了)
	副支部長	上田 和徳	(建設平3院修了)
	副支部長	深田 啓輔	(化環平5卒・7院修了)
熊本支部	支 部 長	柿下 耕一	(電気昭61卒)
	副支部長	水野 節	(機械平14卒・16院修了)
	副支部長	本田 恭久	(福祉建築平20卒)
大阪支部	支 部 長	平岡 学	(機械昭63卒・平2院修了)
	副支部長	橋本 芳典	(電気平12卒・14院修了)
	副支部長	中矢 繁芳	(福・機器平16卒・18院修了)
東京支部	支 部 長	柏原 康彦	(機械昭56卒)
	副支部長	後藤 正徳	(エネ昭57卒)
	副支部長	豊田 耕一	(電気昭58卒)

■ 理事名簿

会 長	松尾 孝美	(エネ昭55卒)
副会長	戸高 孝	(電気昭58卒)
会 計	楠 敦志	(電子平2卒)
顧 問	新見 昌也	(機械昭59卒・61院修了)
	斎藤 国壽	(機械昭53卒)
	森 勝浩	(機械昭63卒)
	藤澤 徹	(電子平5卒・7年院修了)
	雲井 将文	(電気平2卒・4院修了)
	吉野 清己	(機械昭52卒)
	菰木 禎史	(電気平3卒・5院修了)

お 知 ら せ

・退職者の紹介

共創理工学科数理学コースの家本宣幸教授、自然科学コースの仲野誠教授、創生工学科電気電子コースの池田直美嘱託職員、福祉メカトロニクスコースの木庭博美嘱託職員、学務係の内藤道夫嘱託職員が令和3年3月をもって退職されます。

・学位取得者の紹介

令和2年度博士学位を取得された方々を紹介いたします。(学位記番号順・敬称略)

藤井 晶、坂本憲昭

・卒業証明書の問い合わせについて

最近、同窓会に卒業生から卒業証明書の問い合わせが多く見られます。同窓会では証明書等の発行業務は行っておりませんので、卒業証明書等のお問い合わせやお申込みは、下記のところをお願いいたします。

住所：〒870-1192 大分市大字旦野原700番地
大分大学理工学部学務係
電話：097-554-7757 または、7758

大分大学理工学部(工学部)同窓会
Facebookのお知らせ

同窓会長 松 尾 孝 美

翔工会のFacebookを、東京支部副支部長の豊田耕一さんに開設していただきました。これから、内容を増やしていきたいと思いますので、どうぞ、ご利用をよろしくお願いいたします。

Googleで、「大分大学工学部同窓会」で検索すると、以下のように、Facebookページを見つけることができます。



訃 報



次の方の訃報に接しました。
謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

機械工学科	昭 57 年 卒	池 田 寛 様	(令2年5月)
電気工学科	昭 51 年 卒	田 代 雅 美 様	(令2年1月1日)
	昭 58 年 卒	小 林 清 高 様	(令元年5月)
	平6年院修	金 尾 真 一 様	(令2年)
組織工学科	昭 54 年 卒	山 下 南 次 様	(令元年6月23日)
	昭 55 年 卒	朝 見 純 一 様	
	昭 61 年 卒	林 裕 樹 様	
	平 2 年 卒	矢 野 尚 様	
	平27年院修	松 崎 秀 則 様	
応用化学科	昭 53 年 卒	中 本 隼 人 様	
	昭 53 年 卒	平 野 利 治 様	(平27年5月)
	昭 55 年 卒	吉 良 義 昌 様	(平29年)
	昭 58 年 卒	福 村 浩 二 様	(平26年12月)
	平 9 年 卒	竹下(赤岩) 馨 様	(平30年11月)
	平12年院修	高 木 俊 昭 様	(平29年12月2日)
エネルギー工学科	昭 55 年 卒	加 地 恭 治 様	(令2年1月7日)
	平 2 年 卒	福 永 陽 一 朗 様	(令元年5月22日)
	平 3 年 卒	長 友 美 穂 子 様	
建設工学科	昭 58 年 卒	齊 藤 三 己 様	
	平 9 年 卒	繁 永 和 典 様	(平30年)
電子工学科	昭 62 年 卒	山野内 康 様	

翔工会ホームページのお知らせ

・ ホームページのURL

<http://shokou.csis.oita-u.ac.jp/>

機関誌PDFをダウンロードできます。
また、住所変更もできます。

・ ホームページに関する質問や要望

同窓会活動に関する質問、要望等ございましたら、
shokou-request@oita-u.ac.jp
までご連絡ください。



理工学部ホームページのお知らせ

・ ホームページのURL

<https://www.st.oita-u.ac.jp/>

各学科のホームページも紹介しております。
今現在の理工学部・各学科の様子をぜひご覧ください。



編集後記

翔工会会長 松尾孝美

機関誌「翔工」第31号の発行に関しまして、ご多忙中にもかかわらず、快くご執筆をお引き受けくださいました先生方に厚く御礼申し上げます。また、各部会編集委員、同窓会事務の方々に感謝いたします。

今回はコロナ禍の影響や学部改組に伴う組織改編の検討の遅れもあり、同窓会活動が滞ってしまいましたことを重ねてお詫びいたします。今回のことを教訓に卒業生と同窓会ならびに研究室とのつながりを大切にしていくための方策を検討したいと思います。皆様からのご意見をお寄せいただけたらと存じます（宛先：matsuo@oita-u.ac.jp）。